新竹商店社長 新竹（あらたけ） 浩子（ひろこ）さん

駅弁に詰める記憶と感動 ⑤

人間発見

松阪駅前の活性化に力 ■ 鉄道とともに生きる

松阪駅前は百貨店や大型店、多くの商店も集まる三重県中部有数の繁華街だった。しかし、車社会になり郊外店が相次ぎ誕生したことで、駅前は次第に空き地や空きビルが増えた。

祖父の亮太郎や父の日出男は頼まれたら断れない人で、お金に困った人から駅前の土地を引き取ってほしいと請われると応じていました。昭和時代の後半に大型店「松阪大丸」が建っていた土地は、買い取ってカラオケ店や駐車場として使っていました。

2015年に父が亡くなって数年後、弟で次男の栄紀が「あの土地にビルを建てて経営したい」と言い出しました。弟は地元の百五銀行に勤めていて、定年後の人生を模索している時期でした。最初は耳を疑いましたが、「栄紀ならうまくいくのでは」と思いました。本店勤務や、地元金融機関との競争が厳しい愛知県で支店長をしてきた人です。綿密な経営計画を立てていることは確かでした。

きょうだい5人で集まり、ビル建設を決めました。父が生前「あの土地でウチの駅弁を食べてもらい、にぎわいを生む場所にしたい」と話していたことが決め手となりました。20年暮れ、栄紀の会社が3億円をかけて5階建てのビルを完成させました。父の名にちなみ「サンライズビル」と命名しました。

松阪は三井家発祥の地で、日本有数の企業グループゆかりの場所です。レストランや喫茶店のほか、証券会社の支店をテナントに呼び込んだのは、松阪をもう一度経済活動の場としてよみがえらせたいという願いからです。

21年11月、静岡県島田市にある食の体験施設「KADODE OOIGAWA」を訪ねた。思い出の「おじいちゃんの機関車」に再会するためだ。

再会したのは1946年に製造され、福島県などを走ったC11形312号機です。祖父は松阪市にあったドライブインに展示するため、廃車になったこの蒸気機関車を75年に購入しました。機関車はドライブインの一角に飾られ、中学生だった私はいの一番に運転台に入らせてもらいました。しかし87年に静岡の大井川鉄道に譲渡されました。

もう動かないと思っていたC11は、大井川鉄道の関係者の手で復活したのです。2004年には動いている様子を現地に見に行きましたが、思わず涙がこぼれました。

その後また動かなくなると、「預かっていた機関車が走らなくなった。申し訳ない」と連絡があり、ナンバープレートが送られてきました。プレートはいま、祖父や鉄道、地域と店を結ぶきずなとなっています。昨秋再会したC11はきれいにされ、施設からよく見える場所に展示されていました。大勢に愛される本当に幸せな機関車です。

新型コロナウイルスには影響を受けたが、新竹商店の駅弁は全国の鉄道ファンやグルメに大人気だ。

緊急事態宣言やまん延防止等重点措置で外出の自粛が求められるようになると、店頭の売り上げが大きく下がりました。売れたのは1つ1500円の「モー太郎弁当」が2つだけ、という日が続いたこともあります。そのうち「友の会」と呼んでいる、全国にいるお得意様が通販で弁当を買ってくれるようになりました。県境を越える旅行の自粛要請が解かれた現在は、再び店で弁当を買ってくださる旅行者も増えてきました。

娘の実奈が美容師の仕事の傍ら店を手伝ってくれます。この仕事はすてきだといってくれます。子どものころ十分接してやれなかった思いがありますが、「人の楽しいひと時を提供できるから」と聞くと救われます。

「きょうだい仲良く仕事をする」が新竹家のモットー。弟で長男の信哉は闘病しながら副社長、三男の功はドライブインの責任者で調理現場の柱でもあります。四男の正は金庫を守る経理です。私たちはこれからも、地域や鉄道とともに生きていきます。

（津支局長　小山隆司が担当しました）

祖父が購入した「C11」に再会する新竹さん（静岡県島田市）